

21世紀の扉

赤間 義徳

二十一世紀の扉はまだ閉ざされている

扉には言葉が刻みこまれている

「二十一世紀はふたたび精神の時代となるであろう。

もしそうでなければ それは存在しないであろう。

」

黒田大圓方丈様が

みなぎる信念の拳こぶしで

扉をたたく

精神の扉はついに開かれるだろう

海外留学僧たちは 東西の十字街頭から

釈尊へ至る新鮮な道を 説き始めるだろう

われらも あとにつづこうではないか

心を合わせて

二十一世紀を支える

佛教精神の大黒柱を

ここに 成寿山「善光寺」に

すつくと 建てようではないか。

「二十一世紀はふたたび精神の時代となるであろう。もしそうでなければ、それは存在しないであろう」。

右は、フランス人で国際的に行動した作家アンドレ・マルローの言葉です。

これを理解するには、自分の身のまわりだけでなく視線を地球全体に向けてみる世界的視野が必要である。たとえば中近東でなにかがおこり石油がなくなったら日本はどうなるだろうか。先ごろのオイルショックを思いだせば、日本だけではこの地球に生きていけないことが分るでしょう。

戦後四十年、地球のどこかで戦争がおこり今も続いていることも忘れてはならないでしょう。戦争の火種はあちこちにくすぶっており「世界破滅時計」は破滅の三分前をさしているのです。科学・技術はモノ中心に進歩し、精神の世界はおきざりにされた。一例をあげると、実の親が

保険金欲しさにわが子を殺す事件が報道されても、それほどショックをうけなくなってきたいます。日本はモノがあふれて心が貧しい時代になっていきます。水爆は地球を何回も破壊するほどあります。もつとすごい殺人兵器も考案してあります。もし「精神の時代」とならなければ地球は破滅し二十一世紀は存在しない、とマルローは予言し警告しているのです。

自分の身のまわりが平和だからとタカをくくっているととり返しのつかないことになります。先祖からうけついで地球を子孫に渡せなくなる。どうしたらいいか、われわれひとり一人は無力だ。しかしあきらめてはいけません。海外留学僧派遣に少しでも手を貸すことで、二十一世紀の地球存続の大事業に参加できるからです。

二十一世紀は目前に迫っている。今すぐに心を耕す人材を多く育て世界に派遣しなくてはならない。世界的視野をもつ海外留学僧派遣は、



自分から遠い問題ではないのです。地球が存続しなくては先祖も子孫もありませんよ。日米や日欧の経済戦争もモノでいったら片づかない。心でいけば必ず道は開ける。家庭でもふたたび心の時代にならなくては崩壊します。モノがないのではない。それを使う心によってモノが生きているのです。進歩した科学・技術を生命を救う医療に使うか、殺人兵器に役立てるかは、心の問題です。

私ごとで恐縮ですが、あきかんに毎日三十円以上入れています。自分のための貯金ではなく海外留学僧派遣のためですから、そのたびに合掌します。毎日ということが大切で、合掌をするたびに心は「善光寺」につながり二十一世紀を「精神の時代」とするための大事業にもつながります。誰にでも無理なくできます。今すぐにはじめてみようではありませんか。